

【問題提起】

「持続可能な地域文化のあり方について」

講 師 ニッセイ基礎研究所社会研究部 芸術文化プロジェクト室

主任研究員 大澤 寅雄氏

皆さんおはようございます。ご紹介いただきましたニッセイ基礎研究所の大澤です。

ニッセイ基礎研究所というのは東京にある会社ですが、実は、私5年前から糸島で生活しておりまして、仕事の中身をメールとかインターネットで会社とやり取りしながら働いています。

今日のこのボランティアフォーラムのテーマは、9月ぐらいでしたか、藤原君と田中さんと話して、僕の話は「持続可能な地域文化」というテーマにしましょうとなりました。それはボランティアに限らず僕は仕事で文化政策とアートマネジメントということを研究していますが、常々このテーマを考えながらやっています。

今日は、少しボランティアということに引き寄せてその話をしようと思っています。

最近ニュースで話題になったことをご存知でしょうか。

2020年、東京オリンピック・パラリンピックでボランティアの応募が目標8万人に達した、と書いてありましたが、目標自体もう少し多かったような気がします。10万、9万でしたか、いつの間にか目標の数値が変わったのではないかと、いろいろな思いながらも、まあ8万人は集まったのかと。そんなニュースがありました。

皆さんも耳にされていると思いますが、批判の意見で、ブラックボランティアとか、やりがい搾取という言葉です。

オリンピックに関してはやはりその参加条件、活動条件が酷いのではないかという話があるようですが、このブラックボランティアとか、やりがい搾取という言葉が度々僕の周りでも聞かれるようになりました。芸術活動、文化活動を支えるボランティアを始め、僕の仲間も笑いながら、自虐的に「これやりがい搾取だよ」とか、「これブラックだよなあ」みたいなことをよく言っていますが、果たして本当に笑える話なのか、というところが一方ではあります。

このニュースの中でオリンピックの組織委員会の事務総長の方が、「ボランティアは奉仕ということで、お金をもらうことが目的ではない、人生において新たな学びをすることがボランティア」というふうな立派なことをおっしゃっています。

そのとおりですけれども、私にはなんとなくモヤっとするところがあります。このようにブラックボランティアとか、やりがい搾取ということを書いている人たちのネットを読みながら、どうしてこういう言葉がこんなに増えてきたのだろうかと思って、僕なりにまとめたのは、営利や私益のために行われている活動なのに、無償でやらされているのではないかということです。この事業、この活動自体誰かが儲かること、儲けを目的にしてやっているのに無償でやらされているということの感覚がどうもありそうだとか、あと報酬

の代わりにやりがいを強く意識させている、これは普通の善意でやっているボランティア、公益でやっているボランティアにしても起こりうることで、タダでやらされていると思いつつ、「でもやりがいがあるんでしょ、好きだから私達やってるよ」っていうことを強く言い過ぎると、本人は、「いや、そこまでのやりがいは、実はそうは思っていないんだよ」、というギャップがそう思わせるのでしょう。

そこは本人のやりがいと周囲が求めているやりがいとの間のギャップが、ブラックとか搾取というふうに言われかねない状況になっているのだと思います。

あと説明不足、確かに目標8万人というふうに掲げたものの、実は、交通費が出ませんとか、劣悪な環境でやろうとしていることに対して、どういう条件でそれをやるのか、というところの説明があまりなされてなく、行ってみたら弁当も出ないみたいな話もあるのではないのでしょうか。そうするとボランティアという活動自体が不信感につながってしまうこともありそうだと思います。

そんな最近のニュースとあわせて、ボランティアとか文化ボランティアという言葉ですが、今日お集まりの方はたいがいご存知だと思いますが、「最近そういえば“ボランティア”って言わないかも？」ということ、三人で最初の9月に打ち合わせた時、話した記憶があります。そういえば“サポーター”という言い方のほうが多いかも知れません。

ボランティアサポーターといわれている活動として、実際、最近日本のなかで芸術祭がたくさん開かれていて、2000年以降の国際的な芸術祭として、2年に一回のビエンナーレ、3年に一回のトリエンナーレなどが行われるようになりました。

その代表的な事例である瀬戸内国際芸術祭では、「こえび隊」というボランティアサポーターが活躍しています。ボランティアなのかサポーターなのかどっちなのだろう、と突っ込みたくなるのですが、英語を話す人は、ボランティアサポーターという言葉を読んで奇妙と思わないのかと心配します。

同じような国際芸術祭で新潟県の大地的芸術祭もあります。越後妻有というエリアでやっている国際芸術祭で「こへび隊」と呼んでいます、こちらはサポーターとホームページ上では言っていました。どちらのケースも実はオーガナイズされた代表は北川フラムさんという著名な方ですが、今までの一般的なボランティアという言葉のまま使わずに、ボランティアサポーター、あるいはサポーターと言っていて、こだわりが少し感じられるところがあります。

北川フラムさんはかかわっていませんが、横浜トリエンナーレも最近サポーターという言い方をしていました。ハマトリーツという、横浜っぽいカタカナ英語使っちゃった言い方の団体もあります。

この3つを取り上げても、そこに書かれていることから感じることは、いずれの組織もアートが好きということだけではなく、例えば美術や建築に限らず、経済学、社会学、語学などを学ぶ学生や、島が好きとか、まちづくりに興味があるという人々まで様々で、何かしら芸術や文化そのものへの関心だけではなく、いろいろな方面の関心

の持ち方を広く受け止めている団体だと感じられます。

しかも、そういう領域における専門性みたいなものを是非分かち合い、そして発揮してください、私たちもその専門性を求めていますので、という考え方を興味深いと思ってみておりました。

今ここまでは最近のニュースと事例を見てきたわけですが、一応私も仕事では研究者というか、シンクタンクという肩書をもっていますので、調査報告書をよんだり、解釈したり、その数字を使って皆さんに説明するのが仕事ですので、お話をいたします。

内閣府で、平成25年度以降、市民の社会貢献に関する実態調査を行っています。

国が実施している調査なので、サンプルも全国に居住している大人20歳から69歳までの一般の人たちが対象で、約1万人の規模です。これはボランティアに関わるか、関わらないか、また文化に関心があるか否か、一般の人たちの客観的なデータとして見られるのではないかと考えています。これを見ながら、普通の人はボランティアをどう捉えているのか、どう思っているのだろうかを少しお話します。

この中にボランティアを経験したことがありますか、という調査があって、平成25年度以降毎年やっていますが、直近で公開されているのが28年度なので平成25、26、27、28年の4年間の変化ということになります。4年間での変化を見た時に、平成25年度（2013年度）ですが、そこで質問していたのは、ボランティアをしたことがあるという項目の中に東日本大震災発生前からしていた、発生以降するようになった、と分けて聞いています。それだけ東日本大震災をきっかけにボランティアへの関わり方が増えたかどうかを、恐らく内閣府としても把握したかったのだと思います。

ボランティアの経験のある方が、東日本大震災発生前、後をあわせると35%。経験したことがないが65%という結果ですが、28年度、直近になると、経験したことがある17%、これははっきりと減っています。

これは文化ボランティアに絞ると結構減ってきているのではないかな、と予想されます。さらにボランティア活動に参加した分野を訊ねていますが、一番多いのがまちづくり、二番目は子ども・青少年育成、それから保健・医療・福祉、というところからその他に至るまでの項目、これは25年度28年度おなじ選択肢ですが、一項目だけ雇用促進、雇用支援という項目が28年度はなくなっています。統計データをみると、それは25年度だけでした。

その中の芸術文化・スポーツという項目ですが、経験したことがある人の中で、これが25年度は、22%でした。もっと詳しく言うと全体の中で35%がボランティアを経験した事があると答えていましたが、その35%の人たちに訊ねたところ、芸術文化・スポーツのボランティア活動をした人が22%です。それが28年度は16%に減っています。要は参加した人が全体の中で結構減っている状況で、その中でも芸術文化・スポーツに関わっている人も減っているということは、「これは随分減っているなあ」という事がよく分かります。ただこの中で例えば、地域安全とか災害救助支援というところが増えているの

は、興味深いところです。

次に参加の理由、これは平成25年度の調査と28年度の調査で結構、選択肢の文言が変わっていて単純に比較が出来ないと思いますが、25年度でいうと活動を通じて自己啓発や自らの成長に繋がるという考え方が一番にきています。その次に困っている人を支援したい、というのがあって職業人や住民としての責務を果たすためという項目がきており、ここで注目したかったのが、自分や家族が関係する活動への支援というのが4番目でした。ところが28年度になると、文言が変わってはいますが、社会の役に立ちたいと思ったからというのが、自己啓発とか自分の成長よりもはるかに増えています。

実は、自分のためにやりたいと思う人が増えてきているのではないかな、という僕の思い込みがあったわけですが、データを見ると「あれっ！」ということで、そうじゃありませんでした。社会の役に立ちたい、困っている人を支援したいという気持ちのほうが強くなっている、これは僕自身すごく意外でした。

あと自分や家族が関係している活動への支援というのも増えています。25年度に比べると結構増えています。

次は、参加の妨げになる要因ですが、ボランティアの活動をしたけれども、例えば活動に参加する時間がない、忙しいから、これは分かりますね。

「ボランティアしない」と誘っても、「いや忙しくて」っていうふうに、まず言われるというのがあります。

25年度の場合は、その2番目に活動に参加する交通費がなく自分で交通費を負担しなきゃいけない、その負担感が大きいとしてあがっています。

3番目にボランティア活動に関する情報があまりない、という話があがっていました。

これが28年度になると、参加する時間がないが同じようなパーセンテージで1番目、これは相変わらずですが、ボランティア活動に関する十分な情報がないという理由が活動経費の問題、経費にたいする負担感よりも情報が入手できないというのが上回っています。

このあたりの4年間の変化を見た時に、もう一回整理すると、

ボランティア活動したことがあるという割合が結構減っている。さらに芸術・文化・スポーツの参加割合も減っている。さらに参加の理由が自己啓発や自らの成長ということよりも困っている人たちを支援する、社会の役に立ちたいというのが増えて、この順位が入れ替わり、さらに自分や家族が関係している活動の支援が増え方としては大きかった。これらには、いろいろな示唆があるなど考えられます。

さらにもう一つは、その参加の妨げになる理由にしても時間がない、忙しいということはそんなに変わらないのだが、十分な情報がないというのが結構大きく増えている。

これらの論点を少し整理して、今日、是非考えてみたいと私が思ったのは、どうすれば文化芸術分野のボランティアの活性化ができるのかを考えるときに、

一つはその文化芸術を通じて困っている人を支援するとか、社会の役に立つという参加動機に答えるような説明が有効だろうか、すぐに有効だ、というふうに言えないというの

が自分の中にまだ残っており、ぜひ皆さんと一緒に考えてみたいと思います。

それと、自分に近い人、例えば家族などにしても文化芸術との関わりとか距離感をどう説明すればいいのかと迷います。自分や家族が関係している活動だったら手伝うよ、という人がこれだけ増えているということは、自分に身近な人からそういう説明がまだまだ足りてなかったのではないかと、ということが考えられます。

あと時間の問題ですが、忙しくても参加できるような活動内容とか方法はないのかと。

「忙しいから!」「残念だけど」で終わってしまっているのではないかなと、考えます。

忙しくても「こういうことだったら出来るのではないかと」とか、「こういう方法なら関わられるよ」というふうにいると、「それだったらやってみようかな」と思えるものもあると思います。

情報の件ですが、ボランティアに関する情報というのは、本当に公開されているのかと疑いたくなります。関わって欲しい人に届くように、「若い人に関わってほしいですよ」という情報を若い人に届くような出し方を本当にしているのかと思います。

実は、今日のこのフォーラム開催を「Facebook で発信して!」と、藤原君に言って作ってもらったのですが、やはりまだまだ届いてないんだな、ということを僕も感じています。ではどうやったら届くのだろう、その届くメディア、媒体はどうすればいいんだろうということを考える必要があります。

最後に、ここからが今日の話の本筋ですが、その本筋はまた皆さんとのディスカッションとか、後ほどの議論の中で続けられるといいなと思っていますが、皆さんがおやりになっているボランティア活動、そもそも続くことは可能なんだろうかと思います。

今日このフォーラムが10回目ということで、よく続いてきたと思いますが、この先も20回30回100回と続いていくことは可能かなあと、心配になります。

その活動自体もそうですが、ある活動は、地域の持続可能性と大きく関わってきます。

いろんな地域があって糸島にもこれは小さな集落があって、この集落がもうこのあと10年したら、僕の住んでいるところもそうですが、どんどん皆高齢化していくと、「えー大丈夫かな?この地域、続けられるのかな?」と心配になります。

その地域の持続可能性についての文化ボランティアの役割、ということ、ちゃんと必要とされているのかどうか、というところも考えるべきだと思います。

今回、問題提起している“持続可能性”という言葉が文化芸術に関わるキーワードなんじゃないかと思って、Wikipedia から拾ってみますと、「人間活動、特に文明の利器を用いた活動が将来に渡って持続できるかどうかを表す概念であり、エコロジー、経済、政治、文化の4つの分野を含む」とあり、文化も、持続可能性という問題に今はすぐく直面しているように思っています。

そのあたりのことを10回目というフォーラムのこの節目の年に考えてみようというのが今日の問題提起であります。

以上です。